

主論文の要旨

腋窩ポケット・経胸腔アプローチによる小児のペースメーカー治療：リード不全とポケット合併症を回避する工夫と中期遠隔成績

東京女子医科大学心臓血管外科学教室
(主任：山崎健二教授)
小坂 由道

日本小児循環器学会雑誌 第27巻 第2号 98頁～104頁
(平成23年3月1日発行)に掲載

【要旨】

小児では血管径が細いこと、先天性心疾患の合併が多いことから心外膜リードを使用することが多い。植え込み術では一般的にリードは開胸で移植され、剣状突起下を通して上腹部皮下に作成したポケット内で本体と接続される（剣状突起下アプローチ）。しかしこの方法ではリードの断線、被覆材の損傷が高頻度であることが知られており、また本体移植部位では皮膚潰瘍の発生が稀ではない。一方、腋窩アプローチという移植方法があり、開胸で移植されたリードは肋間を通して腋窩皮下に作成したポケット内で本体と接続される。われわれはこの方法に剣状突起下アプローチの問題点を解決できる可能性があると考え施行してきた。しかしその遠隔成績はこれまでに報告されていない。本研究では神奈川県立こども医療センターにおいて2003年から2009年の期間に腋窩アプローチを施行した6歳以下17症例の遠隔成績を調査した。平均観察期間は35カ月（最長76カ月）であった。ペースメーカー関連死亡を認めず、合併症は早期に本体の細菌感染を1例に、遠隔期にリード不全を1例に認めたのみであった。術後5年のリード不全回避率は94%で、過去に報告された剣状突起下アプローチ（69%）と比較し良好であった。以上の中期遠隔成績は腋窩アプローチが小児ペースメーカー治療において有用であることを示すものと思われた。